

言葉の教育は母親の仕事

“学ぶ”という言葉は、昔は“まねぶ”と発音し、“真^ま似^ねる”ことを意味する言葉でした。その“まねぶ”ことを意味する言葉が、“まなぶ”と“まねる”との二つの言葉に分かれ、その意味や使い方が別々に分かれて発展して来ました。けれども、“学ぶ”ことの本質はやはり“真似る”ことにあり、と私は思っています。

子供は、母親を始め、周囲にいる人々の言葉を耳にし、それを“真似”ている間に、その意味や使い方を理解し、記憶し、それが使えるようになるのです。

時計や眼鏡という言葉にしても、「これが時計というものですよ」「これが眼鏡ですよ」というように教えられるよりも、「お父さんの時計をいたずらしてはいけません」とか「テーブルの上の眼鏡を持って来てね」とか、叱られたり、用事を言い付けられたりしている間に自然と理解し、覚え、真似ることによって言葉を覚えていることが多いのです。

アメリカで、赤ちゃんを、人間の言葉の飛びかう所で育てたものと、言葉の聞こえない静かな所で育てたものと、この二つのグループの赤ち

ゃんの知能を比較してみたところが、前者の方が後者よりも遙かに優れていた、と報告されています。

赤ちゃんは、生まれ落ちた瞬間から、言葉を耳にし、それを記憶し、それを真似ることによって言葉を覚え、言葉を覚えることによって人間としての能力を身につけるのです。言葉を覚えないうちは、チンパンジーの赤ちゃんよりも能力が低い、とさえ言われています。

赤ちゃんは、“真似る”ことによって、言葉を“学ぶ”のですから、真似るべき言葉を赤ちゃんに出来る限り多く聞かせることが必要です。

ですから、母親は、出来る限り赤ちゃんに語りかけるように努力しなければならない、と私は思います。